

## 井伏鱒二の文学の日記

The Diaries of Ibuse Masuji

ジョン・ツウリト\*

The tradition of diary literature, *nikki bungaku*, is a long and distinguished one within Japanese letters. Critical attention, however, has focused on classical diarists and not those of modern times. Ibuse Masuji (bn.1898) is one such present-day writer whose diaries, both his own and those kept by his fictional characters, are of interest not only for what they reveal about the author himself, but for what they may imply about the very nature of the genre.

Ibuse's own personal diaries frequently recall -and in a sense, thus memorialize and revive- his unusually numerous friends and relatives who died premature deaths. Ibuse's diaries may be a means of expiating a kind of guilt he experiences as their survivor ; a guilt more fully explored in his fictional diaries, the most notable of which is Shigematsu's in *Black Rain* (Kuroi ame). Here, a survivor of the atomic holocaust in Hiroshima attempts to conceptualize, and thereby master, the trauma of the bomb by rewriting years later his

---

\* JOHN TREAT [現職] エール大学大学院生

brief diary of August, 1945.

In conclusion, diaries, which by their periodic entries come to resemble a ritual, serve to bring a disorderly or even incomprehensible external world under the control of the writer's literary and recreative act.

これから研究発表をさせていただきます。

日記ということは日本文学に長くて重要な伝統を持っています。日本文学の出発点である万葉集にでる大伴家持の歌をはじめ、ずっと近代の樋口一葉の作品とその他に至るまで、いわゆる日記文学は独特な歴史を占めます。

井伏はこの長い伝統を利用して、日記という文学形式で自分の小説世界を形成しようと目論みます。しかし、井伏をこの伝統的な世界のほかの作家から識別できるのは先生がこの日記形式文学（いわゆる日記体文学）に付与した特別な文学的、あるいは心理的意義でしょう。

日記体文学の作品発表は井伏の生涯にわたって、一貫してみられることです。一番最初に発表した正式な日記体作品としては、昭和5年に載せ始めた「さざなみ軍記」という源平合戦のものの青年がつけていた亡命日記でしょうが、それよりも早い大正12年の「幽閉」（あとの「山椒魚」）という処女作にも日記体文学とよく似ているところ——つまり、自分の経験を年代的で記録的に書きとめること——があると思います。はっきり言うと、こんなふうに構成された作品は井伏には全然めずらしくなくて、実は先生の代表的で顕著な文学上の技術といえるかも知れません。井伏の初期の「さざなみ軍記」をはじめ、中期の「多甚古村」もあるし、「南航大概記」もあるし、戦後の「黒い雨」などそのほかもあります。日記体文学を傘下におく記録文学というジャンルにまで広げれば、井伏の文学の多くが記録文学と呼べましょう。歴史小

説などばかりではなくて、先生の文学は一般的に記録的な文書に基づくわけです。記録的な文書は中国や日本の歴史の記録などにかぎらず、渡し舟の切符や遺書やショッピングリストなど極めて日常的な品物、それが自分の経験を確実にする文書から引用する場合も多くあります。ときにはこの記録文書は現実に存在するものですが、おそらく多くの物がやはり井伏自身の作った架空の産物でしょう。いずれにしても、先生の文学はいわゆる事実を示す文書で一杯です。何故こういうふうに作品を作り上げるのかとたずねられた井伏の答えは、「書きやすいからですよ。日記でもんは、文学では強いジャンルだ<sup>(注1)</sup>。」というのでした。日記というものは強いジャンルです。どういう意味でしょうか。強いと言いますと、日記、又、日記体の文章は確実性のちからを持つことを示すからです。日記とその似かよっている記録文学を読むと、読者たちは或る信じやすい現実が想像でき、認識できるのです。勿論、作家も読者ですから、同じ認識作業に参加します。こういった認識する手続きは日記体文学の根本的な活動です。作品の全部は作家が想像した文章だということを意識しても、日記体文学の最大特長はその信頼性そのものです。言葉は違っても、井伏自身これに類した事をいいました。昭和20年度に井伏は殆どなにも発表しませんでした。翌年になると、井伏はその沈黙をやぶって、戦後文学のひとつの名作である「侘助」を出しました。「侘助」の後記に面白いことが書いてあります。「敗戦の年——昭和二十年度には私は五枚の随筆を一つ発表しただけで、但し日記だけは毎日つけてゐた。その頃は自分の貧弱な空想でまとめた物語などよりも、庶民の一人として経験する実際の記録の方が文学として幾らか価値あると思つてゐたからである。」この引用のもっとも重要なところはやはり「記録」ということばです。記録と言ひ換れば、ようするに自分が思い出す諸経験を字で具体的に訳すことです。或いは文章を通じて経験を対象化することともいえましょう。これはある程度までどんな文学にもあてはまる事です。日記体文学の場合にその記録形式によって独自の信頼性が与えられる訳です。井伏鱒二がこういう日記体文学を書くうえ

での関心は、文章で外的現実を描くことではなく、実際にある内的現実を産・ず・ることです。これを証拠立てるために井伏の自分の日記と回想録を暫く見  
てみたいと思います。

井伏鱒二は自身の人生のこと、親戚や友人たちのことを、文学に何度も  
取り上げたことが意外に多いです。その中に、極めて目立つのは、先生が描  
いた親戚と友達はだいたい若死したひとびとです。井伏の文学の中で若いと  
しに無くなった人物は特別な地位を占めます。ひとつの例として、昭和11年  
の「雞肋集」という自叙伝はこんな夭折したひとで満ち満ちています。井伏  
の言葉を借りれば、「母は育児日誌などつけなかった」<sup>(注3)</sup>ため、幼児期について  
は記憶を、またそれ以後については自身の日記をもとにして、先生はこの作  
品を書きました。いったい何を書いた作品でしたでしょう。何のことよりも、  
井伏には死の思い出は多いらしいです。「雞肋集」によりますと、井伏の一番  
早い記憶が「窪田さんという……老先生〔の〕お葬式に列席した私は伊十と  
いう子守の男に負ぶってもらってゐたこと」<sup>(注4)</sup>でした。ここの死についての  
記憶は珍しくありません。珍しいどころか、その次に続くページには、伊十  
という子守、その妹と兄、井伏自身の弟の圭三、父親、おばさん、おばあさ  
ん、おじいさん、小学校時代の友達と大学時代の親友の青木南八などのそれ  
ぞれの死に関する思い出がどんどん出て来ます。概括すれば、井伏鱒二の文  
学——いや、文学に表現された井伏自身の経験は大いに、死んだひとにとり  
残された生存者の記憶ではないかと思います。井伏の家族と友達は彼を寂し  
さの中に残して去ったので、井伏にはある程度の有罪感が起ってきたよう  
です。それで井伏の文学は一種の鎮魂となるかも知れません。この点において、  
「雞肋集」はユニークな場合ではなく、あとの作品からずっと「黒い雨」ま  
でこの生存者が思う死についての固定観念がみられます。「南航大概記」とい  
う日記にこういう前置きがあります。「私は十年以上も前から一日も一回も日  
記をつけなかったが、入隊してから當分のうちは日記をつけるやうになった。  
初めのうちは暫く丹念につけ、ところが次第に怠けて行って終が有耶無耶に

消えて行く——さういふ風な日記である。私は従軍中に大きな病気にもかからないし、弾丸にも撃たれなかった。宣伝班員として何等の功績も上げなかった。今となっては、この日記も宣伝班員であった頃の私の記念品の一つと思ひたい。<sup>(注5)</sup>ほかに目ばしい記念品がないからである。」この引用でご覧のように、井伏は自分のことを生存者と意識しています。「いきのこり」という意識ばかりではなく、一種の有罪感をしみじみ感じているのです。それで、この日記をつけて発表する手続きによって、その有罪感をいくらか償うことが出来るのです。この同じ意味で、日記と回想文学を書くことによって、井伏は自分より先に死んだひとびとの人生を言葉の中に封じ込めることで永遠の生を蘇生させようと意図するのです。ですから、井伏は大事にしたい人間を自分が書いている言葉を通じていわゆる再生させることも出来ます。この文学による再生が井伏の全作品中に目立つテーマです。父や祖母、青年期の親友や不幸な死を遂げた戦友、また太宰治のように夭折した文壇の友人なども井伏がその死を文章化することにより、文の中に生き続けるのです。文学によって故人の魂を記念し、そして慰めることは井伏にとって文学でありながら魔術、あるいは祈に近い一種の儀式的機能を果します。この意味で、井伏の日記体文学では、その死者の魂を文字にまで定着させるために、死についての話しがこんなによくあるのです。井伏鱒二は言葉が精神的な存在としてよみがえると信じるわけです。この文字の持つ神秘的な能力が、詳しく、井伏の作品に説明されています。

例を二つ申し上げます。昭和14年の「亀」と昭和38年の「誕生日」という短篇小説の両方に、幼い時の事件が出て来ます。子供であった井伏の誕生日、あるいは病気の日などに、彼のおじいさんはどこからか亀を捕えて来て、その甲羅に「満<sup>マス</sup>寿<sup>シ</sup>二」という孫の名前をペンキで書き、亀を放すことをよくしました。井伏の祖父は人間の名前を亀に書いておくことで、長寿の象徴であるその動物の元気を人間へ移すことが出来ると思っていました。祖父がやってくれた世話が——言い換れば、やってくれた儀式が——当時の幼い満寿二を

ずいぶん感心させたので、のちになってから、井伏は自分の子供が病気の時、  
この魔術的、ないし文学的な儀式を真似して行ないました。のみならず、もっ  
と広い意味で、こういう命の力を言葉で伝える儀式を日記体文学の中でも行  
なおうとしました。ようするに、日記をつけるように教えてくれた祖父の持つ  
ていた「書く」行為に対しての信仰は孫の受けた遺産になったというわけ  
です。そしてその遺産が、井伏が描いた死んだ人にとり残された自分を語る作品  
として結晶しています。

井伏鱒二の文学世界では、書くという行為は現実を統制する、交感的な活  
動といえます。しかも、井伏の日記体文学の世界では、その活動は儀式の形  
を取ります。もし儀式という言葉、自然、あるいは人間の変転の一段階  
を、それと通じて別の段階・新しい世界へと導きあげる手続きと定義すれば  
亀の甲羅に満寿二と書く場合のみか、死んだ友人達や親戚の回想について書  
く場合もこの定義が当てはまります。井伏の作中人物がつける日記を調べて  
みても同じことがわかります。「さざなみ軍記」の主人公の日記のつけかたは  
以下のように描かれています。「宮地小太郎は覺丹の傍に端坐して、私と覺丹  
の談話に最後まで耳を傾けてゐた。そして私が日記を書くときいつもさうし  
てくれるやうに、小太郎は私のために篝火をたいてくれた。私はその篝火の  
明るみで今宵もこの日記をしたためる。」  
(注6)

日記を書く場所も、時間も、決まっています。先にいったように、日記を  
つけることが「新しい世界へと導きあげる手続き」となるわけです。源平合  
戦の騒ぎで途方にくれた青年にとって、毎晩かがり火のそばで行なわれるこ  
の儀式がその日一日の無茶苦茶な経験を整理できる時間と空間とを与えます。  
この青年が自分の日記に自分の生ける現実を作り出すわけです。たとえば、  
こういう文章があります。

「正月三十日

いはゆる元暦元年正月三十日である。しかし私はあくまでも壽永三年正月  
三十日と記したい——壽永三年正月三十日」  
(注7)

つまり、彼がそう書くから、実はそうなるというわけです。この日記が青年の現実を定めます。この日記があることでその著者が精神的に生き延びることが出来るのです。

しかし儀式とそれによる再生についてならば、井伏の最大傑作の「黒い雨」がどの作品よりも分りやすいと言えます。これは井伏の生、あるいは死についての概念と生存者の心理が見事に感得できる作品であって、主なテーマは文学と儀式と存在との深い相互関係であると思います。

文学構造的にみれば、いくつかの日記の集合からなる長篇です。その日記はすべて原爆投下、あるいは戦争下における経験を記録します。「さざなみ軍記」と同じように、人は大災害のときにどう生きるかを調べる文学です。「龜」と同じように、文学を書くという儀式を通じて様々な病気を治療でき、健康の道へ戻って行けるということです。

「黒い雨」の大部分の日記は主人公重松のもので、彼にはとても大事な記録文書となります。「黒い雨」から引用しましょう。「重松は『被爆日記』を毛筆で清書することにした。今までペンで清書した部分は、シゲ子に毛筆で清書<sup>(注8)</sup>しなほさせることにして、その続きを半紙に毛筆で清書することにした。」重松は被爆日記の重要性を認め始めて、それで日記に対しての畏敬の念を現すために、きれいに清書することにしました。つまり、重松は日記とその道具を儀式と同じように大事にしなければならないと決心します。日記を清書すること、それはやはり一種の儀式としてみられます。また引用してみれば、「今月は芒種と蟲供養がすんで、十一日はお田植祭、十四日には舊の菖蒲の節句、十五日には河童祭、二十日には竹伐祭<sup>きり</sup>が続く。この貧相な幾つものお祭は、昔の百姓たちが貧しいながらも生活を大事にしてゐたことの象徴のやうなものである。重松は清書を続けながら、あの阿鼻叫喚の巷を思ひ出すにつけ、百姓たちのお祭が貧弱であればあるほど、我れ人ともに、いとほしむべきものだ<sup>(注9)</sup>という気持になってゐた。」この引用により明確になること、それは重松が生存するための自分の儀式である日記を清書することと、昔の貧しい農民

が守る儀式である祭とが同類であることでしょう。日記体の「黒い雨」では、人間が儀式的な活動を通じて自己を認め、守ることが書かれています。「黒い雨」のテーマを一口に言えば、原子爆弾投下の経験より物理的に生き残る人々が、その経験を概念化し、征服する目的で日記をつけるその儀式の助力で当時の記憶を整理し、受け入れることが可能となり、精神的にも健康を回復させ、再生できるということです。

もう一度「黒い雨」から引用します。「矢須子の日記のつけかたは、四日間か五日間くらい簡単に五行か六行で片づけて、五日目か六日目ぐらいのところで数日間の出来事をまとめて詳しく書き記すやりかたである。これは重松自身がずっと以前から実行してゐた方式で重松が教えてやったから矢須子が踏襲したものである。帰りが遅くて眠くてならない晩は、簡単に片づけることにして置くところからこの着想を得た。重松自称の『緩急式』<sup>(注10)</sup>という日記形式である」ここでは重松は原爆の後遺症で悩む姪の矢須子に、日記をつけるという儀式の訓練をさせることと、その儀式を規則正しく行なうことの二つの重要性を教えます。日記を緩急式と呼び、一種の治療と認める重松、あるいは井伏の感覚は鋭敏です。「黒い雨」の諸人物は皆、自分の文学である日記を通じて彼らの治療を図り、再興された命を求めます。

今日の時間はもうなくなりましたので、結論を述べて終わります。井伏鱒二と彼が作った主人公達は、日記をつける作業のなかで難しいことを試みつつ、同時に簡単なことも試みます。それは、原爆のような大量虐殺を描写しようと目論みつつ、同時に石器時代の人間が洞穴に絵を描いたように、文字の持つ原始的なちからをも体験することと同義なのです。両方とも文化を発生させる儀式的活動と呼べます。文化という言葉の文字どおりに、体験を文に化することによって、その体験を対象化できるのです。

どうも有り難うございました。

注

1. 中村明「作家の文体」(筑摩書房 昭和52年) 24頁



2. 井伏鱒二「侘助」(鎌倉文庫 昭和21年)
3. 井伏鱒二「井伏鱒二全集・第九巻」(筑摩書房 昭和50年) 214頁
4. 同、244頁
5. 全集第10巻 10頁
6. 全集第1巻 416頁
7. 同、438頁
8. 全集第13巻 37頁
9. 同、98頁
10. 同、8頁

## 討議要旨

リディン・オロフ氏より、井伏鱒二の「黒い雨」の中で日記を書き進めていくことが主人公の精神的な治療であったと発表者は述べているが同感できないとの意見があり、発表者から、井伏は「黒い雨」で原爆の悲惨そのものを描こうとしたのではない。被爆した群像の運命、あるいは日常性のありようを書こうとした。井伏の文学世界では、書くという行為は現実を統制する、交感的な活動である。儀式という言葉をも、人間の変転の一段階、それと通じて、新しい段階、新しい世界へと導きあげる手続きと定義すれば、井伏の日記は、とりもなおさず人間の日常的な精神の治療ということに通じるのではないか、という旨の回答があった。

ツベタナ・クリステワ氏より、井伏の日記文学は、日本古典のいわゆる日記文学といわれるものとは形態が異なると思うがどうかとの質問があり、発表者より、同感である。自分は井伏の場合は日記体文学と称したいとの回答があった。

中川成美氏より、発表者は「黒い雨」の分析に儀式というものを取り上げているが、そういう言葉を使わなくても、この中で書かれてあるのは、日常性を奪われた人間がその日常性を回復しようとした、またそうしなければな

らなかった悲しさ、切なさではないかとの質問があり、サナラリー・バックリー氏より、日常性とは儀式と同じことだと思う。発表者の述べたいところは中川氏の述べたことと結局同じことだと思うとの感想があった。